
仮面ライダーテストメント

斎藤一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーテストメント

【Nコード】

N1932Z

【作者名】

斎藤一樹

【あらすじ】

「こんなのつてねえよ……。こんな終わり方、認められるかよ……ッ！」

力無き少年は、神に力を求める。

「誰か……私たちを助けて……！」

その力はただ、大切な者達を護るが為に。

「…なら、俺が守る。そのための力も、ここにあり！」

そして、神と契約した少年は、

「…変、身ッ！」

今、英雄^{ヒーロー}となる。

プロローグ（前書き）

どうも、斎藤一樹です。

取り敢えず予告編として、プロローグをのせました。本当に書くかどうかは分かりません。読みたい、という方はコメント欄に「読みたい」と書いて送って下さい。
それではどうぞ。

ブローグ

ブローグ

「…こんなのってねえよ……。こんな終わり方、認められるかよ…
ッ！」

力無き少年は、神に力を求める。

「誰か……私たちを助けて……！」

その力はただ、大切な者達を護るが為に。

「…なら、俺が守る。そのための力も、ここにある！」

そして、神と契約した少年は、

「…変、身ッ！」

今、英雄^{ヒーロー}となる。

その力は、唯、守るために。

大切な者を、愛しき者を、その手で守るが為に。

「さて、そろそろ終わりにしようか」

… P i ……

「神との契約の元に、罪人に裁きを」

T e s t a m e n t C l i m a x !

「アーメン」

その名は、 仮面ライダー テスタメント 。

ブログ（後書き）

面白そうだと思っていただけ、続きを読みたいと思って頂けましたら、感想で「続きを読みたい」と書いて送って下さい。

もしくは、100PVを突破したら書き始めようかな、と。

読者の皆様に掛かってます。

Episode・01 邂逅（前書き）

ども、期末テスト期間真っ最中の斎藤一樹です。

相変わらず不定期更新の予定ですが、よろしくお願いします！

Episode・01 邂逅

いつも通りの日常が、実はとつくの昔にその姿を変えていたら。そしてその事を知らずに日々を過ごして、ある日突然その事実を突き付けられたなら。皆さんはどうしますか？

あ、どうも、初めまして。私、柊真帆^{ひいらぎまほ}と言います。えっと、高校一年生です。今、目の前で、信じられないような事が繰り広げられています。

私の目の前に突然不気味なバケモノが姿を現し、周囲にいた人々を無差別に襲いだしたのです。ああ、また一人、ソイツの缺のような右腕に腹部を貫かれて、どさりと、地面に倒れ伏しました。

私は、そのバケモノが現れた時に腰を抜かしてしまい、動くことができません。周りにいた人は我先に、と既にいなくなってしまう。後には私と既に動かなくなった数人の方々だけが残されています。助けに來た警察の方も、既に冷たくなられています。

常時であれば吐き気をもたらずであらうその光景に、しかしどこか麻痺してしまっているらしい今の私は、何も感じることはありません。

パニックに陥っているにもかかわらず、私の中のどこか冷静な部分が「もう助かる事は無い」と、客観的な事実を他ならぬ私に突き付けています。そして、一步、また一步と、そいつは近づいてきます。そして、何人もの方々を殺めたその右腕を振り上げました。私

は、本能的に目をぎゅっ、ときつく閉じました。これ以上、この悪夢のような光景を見ないで済むように、と。

今更悔やんでもどうともならないと知りながらも、よりにも寄って今日に限って寄り道をしてしまった自分の事を恨まずには居られません。そして、かつて幼いころに見たヒーローを思い浮かべ、叶わないと分かっているにもかかわらず助けを求めました。

- 私を、助けて。この悪夢から、連れ出して、と。

そういえば。なぜ、私はいま、こうして考え事をするのできるのでしょうか。言葉を換えるのなら、なぜ私は未だ生きているのでしょうか？

恐る恐る、私は固く閉じていた目を開きます。そして、見ました。私に背を向け、振り下ろされているアイツの凶器うでを手を持った鞆で受け止めている、学生服ブレザーを着た、私と同じぐらいの年頃の男性の姿を。

私に背を向けたまま、その方が私に声をかけます。

「よう、お嬢さん。ケガは無いかい？」

こんな状況だというのに、どこか笑みを誘うような、おどけた声。私は驚きのあまり声が出せず、首を縦に振ることでそれに答えました。それが分かったのか、

「そりゃ良かった。悪いね、来るのが遅れちゃって。でも、もう大

丈夫だ。そこで見てな、すぐに終わらせるから」

平然と、そう言つてのけました。……アレと戦つて、勝つつもりなのでしょうか、彼は。警察の方でさえ、あっさりと殺されてしまったというのに。

「やめて下さい、無茶です！私の事は気にしないでいいですから、あなたは逃げてください！」

ほとんど悲鳴に近い声で私が言つても、

「あいにくそいつは、無理な相談つてやつだねえ」

例によつておどけた口調で返されてしまいました。未だ、彼はアイツの腕を受け止めたまま。

「何より、君のような……」

そこで彼は言葉を区切ると、バケモノのお腹を思いつき蹴り飛ばしました。そしてこちらを振り向くと、ウインクして言いました。

「可愛い女の子を残して行けるわけ、無いだろ？」

……こ、こんな状況でこの人は……！いえ、こんな状況で頬を熱くさせている私が言えた事では無いのですが。

あまりの事に言葉が出てこず、口をぱくぱくとさせている私を可笑しそうに見てから、彼は私の隣でアイツに向き直りながら言いました。

「ま、そこで見てな。なあに、勝算の無い戦いはしないさ」

基本的には、ね。

そう小さく付け加えて、彼はポケットから機械のようなバックルを取り出して腰に当てました。すると、腰にあてたそのバックルからベルトが伸び、腰に巻きつきます。…あれは、一体……？そして、彼がそのバックルの右側に付いているスイッチの一つを押すと、
T e s t a m e n t S t a n d b y ! という電子音声が流れ、
エレキギターを掻き鳴らすようなメロディーが流れだしました。突然の事に私の頭はショート寸前です。

更に彼はポケットから新たにUSBメモリのような、また鍵のような形をしたものをベルト上部の穴に差し込むと、それを左に90度倒しました。すると、メロディーが鳴りやみ、代わりに今度は
C o n n e c t という電子音声が鳴りました。そして、

「……変身ッ！」

という掛け声とともに眩い光が彼を包み、光が消えた後、彼の姿は、西洋の騎士を思わせる姿へと変わっていたのです。

Episode・02 日常からの乖離

胸部には十字架の紋章が刻まれた、騎士甲冑のような白銀の装甲を、黒いライダースーツのような物の上に身に纏い、頭部は十字架を模したバイザーの付いたフルフェイスのヘルメットを着けています。そして腰には、例のベルトが巻きついていきます。そして、バイザーの奥で、一瞬、目のような部分が薄く光りました。

不思議と、私はその姿に恐怖を感じませんでした。目の前で異形の存在へと変じたのにも関わらず。

そんな私をあのかげモノから庇うように前に立ち、彼は言いました。

「さあて、懺悔は済んだか？」

言うと、そのまま左腰の十字剣を抜き放ち、アイツに斬りかかりました。

それから数合打ち合い、そしてついにあいつの袂に剣を挟まれてしまいました。……やはり駄目なのか、そう思った時、彼はその腹の腹に蹴りを入れました。

「グウウッ！」

うめき声を上げ、後ろによるめいたそいつに、彼はベルトの背中側のホルスターから銃を取り出し、そいつに連射しました。銃弾を受け、身体のおちこちから煙を上げながらそいつは吹き飛びました。

「んじゃ、終わらせようかね」

そして、ベルトの右腰に付けられた箱から一本の……鍵？を取り出し、銃身後部の穴に斜めに差し込んで90度右に回転させ、鍵（暫定）を銃身と平行になるように傾けました。すると、銃本体から Shooter Climax！ という電子音声流れ、それから銃身の前半分が上下に分かれました。

「神の名の下に、死の救済を」

そして、彼が右手を前に向けた半身になりながら引き鉄トリガーを引くと今度は Testament Full Blast Shooting！ という音と共に、先ほどまでの銃弾とは異なる眩いほどのエネルギーの塊が撃ち出されました。

そして相手に背を向け、手のひらでクルリとその銃を一回転させてからホルスターにしまいつつ、彼は呟きました。

「アーメン」

直後、あのバケモノの身体が爆発しました。そして、彼は腰が抜けて立てない私に手を差し伸べました。爆発を背に、こちらに手を差し伸べるその姿は、まさしく幼い頃に見、そして憧れた正義のヒーローそのものでした。そう、確かあのヒーローの名は……

「……仮面、ライダー………」

助け起こされつつ小さく呟いた私に、その呟きが聞こえていたのか、彼はバックルから鍵を抜き取りながら言いました。

「んじゃあ改めて。俺は明月^{あかつきこうすけ}康介、……仮面ライダーテストメントだ。よろしくな、柊」

変身が解除され、康介さんの顔が露になります。なかなかハンサムです。

「あ、はい」

慌てて返事をしました。……あれ？ところで私、康介さんに名乗りましたっけ？

そんな事を思っていると、

「じゃあな、お嬢さん」

彼はひらひらと手を振り、歩き去っていきました。

「あ、ちょっと……………」

待つて下さい、と言う前に、既に康介さんの後ろ姿はどこにも見えなくなっていました。そう、どこにも。

そして私は今更になって、康介さんが着ていた学生服が私の通う学校のものだった、と気が付いたのでした。

彼の姿、声を思い浮かべるだけで、不思議な事に胸が高鳴ります。私は一体、どうしてしまったのでしょうか……？こんな事、今まで一

度も無かったのに。

Episode・02 日常からの乖離（後書き）

ここでやっと一区切りです。

どうも、最近またWにハマり出した斎藤一樹です。にじファン（NOS）の仮面ライダーW×魔法少女リリカルなのはの作品を二つぐらい読んで、「仮面ライダージョーカーがっこいい……」と思いました。

ところで、テストメントの変身時の「エレキギターを掻き鳴らすような」メロディー、私の脳内イメージでは Girls Dead Monster の Shine Days という曲の、前奏部分をイメージして書いてます。ええ、私の趣味ですが何か（開き直り）。興味のある方は YouTube とかで検索を。

それでは、またお会いしましょう。

設定 第一回（前書き）

今回は、簡単な設定集です。

設定 第一回

仮面ライダーテストメント

主人公、明月康介の変身する仮面ライダー。その出自故か、景教的なモチーフが多くあしらわれている。

武器・属性毎に特化したフォームというのは存在せず、基本フォーム 強化フォームというフォームチェンジしか存在しない。
変身アイテムはバツクルと鍵。

テストメントフォーム

テストメントの基本フォーム。素手での格闘戦に加え、左腰に挿した十字剣 ホーリースラッシュ、腰部後ろのホルスターに収納されている銃 ストライクショット を使ったの戦闘も得意とする。

明月康介

あかつきこうすけ

主人公。仮面ライダーテストメントに変身する。

「神様と契約してテストメントシステムを貰った」と言っている。割と普通の男子高校生。改造した学ランやリーゼント等の不良っぽい格好をしているわけでも無い。そもそも学校の制服はブレザータイプ。全校生徒と友達になろうともしていない。

性格は明るく、社交的。

微妙に人を食った性格と言動をしている。
モットーは「女性に優しく」。

設定 第一回（後書き）

作者「いやいや、例によつて見切り発車だった訳だけど」

康介「ライ」

作者「意外と書けるもんだねえ？」

康介「（無言でストライクショットを構える）」

作者「OK、私が悪かったわ。だからその物騒なブツをしまつて、ね？マジで悪かったから」

康介「しょうがねえな……。あ、あと、話数を追う毎に、不定期に書き足していく予定だから、宜しく」

作者「私の台詞取らないでよ！？」

康介「んじゃ、また次回」

作者「予告ヨロ（ノ＞＜）ノ」

康介「何と言う無茶振り！！」

それでは、また。

『その欲望、解放しろ』

康介「何故ここでオースネタ！？」

Episode 3 日常（前書き）

ヒヤダインさんの クリスマス？なにそれ？美味しいの？
とい
う曲が無性にツボに入った今日この頃。

Episode 3 日常

辺りを煌々と照らす炎の中を、唯ひたすらに走る、走る、走る。つい先ほどまでは賑わいを見せていたこのショッピングセンターも、今はもうあちらこちらが瓦礫と化し、更に目を背けたくなるような黒々とした赫で染められている。

「何でだよ、どうしてだよッ！どうして俺たちがこんな目に……ッ！」

背後に迫るは、四本の馬の足で走る半人半獣の狩人達。その手に持った弓矢や剣、騎乗槍^{ランス}でもって、為す術も無い哀れな子羊たちを追いかけて、まるで翔る様に殺してゆく。

そんな中、

「っ……きゃあッ！」

隣を走っていた幼馴染の少女が、がれきに足を取られ、転んだ。

「^{ほたる}蛍ッ！ー！」

思わず足を止め、彼女に駆け寄り、そして、それは避けようのない破滅と終焉をもたらす。

足から血を流す蛍に駆け寄り、助け起こそうとするも、この状況下ではその行為はどうしようもなく悪手だった。

「こ、こーすけえッ！ー！」

蛍の目が驚愕と絶望の色に染まったのを見て、俺は蛍の視線の先

俺の背後を振り返った。そして

見た。そのケンタウルスの内の一体が斧剣を振りかぶり、今にも振り下ろさんとするところを。

そして、俺は眩い光に包まれ……………。

「……………夢才チかよ」

また、あの時の事を夢に見てしまった。学校帰りに蛍と一緒に買い物に行き、そして始めて襲われてしまい、そして何より始めてテストメントシステムを使用したあの時の事を。

忘れようにも忘れられない。

「……………取り敢えず、学校行くか……………」

正直そんな気分ではないが、サボるわけにもいかないだろう。ベッドからもぞもぞと起き上がり、ベッド脇のフックに吊るしたハンガーに掛けた制服を手取る。パジャマを脱ぎ棄て、Yシャツに袖を通し、その上からブレザーを羽織る。

台所に行き、既に起きていた母に挨拶してから食パンにジャムを塗りたくり、かぶりつく。一通り食べると、母の作ってくれた弁当を受け取り、台所を後にした。途中、廊下で妹の明日葉あすはと擦れ違ったが、明日葉は未だ寝ぼけているようで、良く言えば千鳥足、悪く言えばゾンビ映画に出てきそうなゾンビ歩きをしていたので、俺は

そのままスルーした。

弁当を鞆に詰め、スニーカーをつま先に突っかけるようにして履き、玄関を出る。そして、駐輪場に止めておいた相棒のエンジンをかける。腕時計をちらりと確認する。大体いつも通り。それからシートの下からフルフェイスのヘルメットを取り出し、被る。んじゃ、お姫様をお迎えにあがるとしようか。

いつも待ち合わせている場所にいつもと同じ時間。いつもと同じように、幼馴染の石田蛭いしだはたるはいた。

蛭の手前でバイクを止め、ヘルメットのバイザーを押し上げて蛭に声を掛ける。

「よう、蛭」

そして蛭も、

「うん、おはよう。こーすけ」

と、微笑みながらそう返して来た。

一度バイクから下りてシートの下から予備のヘルメットを取り出し、蛭に投げ渡す。蛭も慣れたもので、アイコンタクトすらせずに俺の意図を酌むと、ヘルメットをキャッチした。この予備のヘルメット、実質的には殆ど蛭専用という扱いになっている。これを使うのは大抵蛭だけで、後はたまに休日あひだに明日葉が使う程度だ。

再度バイクに跨ると、蛭のほうも慣れたもので、何も言わずとも後ろに座り、俺の胴体に腕を回ししがみついた。抱きついた、とも

言う。蛍の体温と暖かさが制服越しに背中に伝わり、鼓動が僅かに早くなる。……これでも、まだマシになった方だ。蛍と二人乗りを始めた頃は、毎回緊張していた。

心中の緊張を振り切るようにヘルメットのバイザーを下ろし、後ろの蛍に声をかける。

「んじゃ、行けるかい？ 蛍」

蛍も、返す。

「うん。いつでもいいよ、こーすけ」

その声を聞きながら、俺はアクセルを踏み込んだ。

Episode・04 平穏な日々（前書き）

戦闘シーンが無いですよ。
中々そこまでいかない……。

・ 12 / 19 修正：月森秋穂 つきもりあきほ 月森秋穂 つきもりあきほ

Episode・04 平穏な日々

バイクで走ること30分。俺と蛍を乗せたバイクは、特に問題もなく目的地である桐下高校に到着した。かつては蛍との二人乗りのバイク通学を同級生から冷やかされたものだが、今となってはもう何も言われなくなった。ただ、生暖かい目で見られるだけだ。……ううむ、納得がいかん。

腕時計を見ると、いつも通り。走る必要もないので、二人並んでのんびりと歩く。教室に入り、クラスメイトの数人に挨拶をして自席に着く。蛍とは同じクラスだ。席はそれなりに離れてはいるが、つきもりあきは席に着くと、隣の席に座っていた月森秋穂が声を掛けてきた。

「やあ、アッキー」

「アッキーやめろ」

いつの間にか妙なあだ名付けやがって。

「いいじゃないかアッキー。可愛いぞアッキー」

「やめろ、ヤーメーローツ！」

「なんで恐竜のドクターが混ざったのさ……」

「なんか電波を受信したんだ」

しれっとした顔で適当に嘘を吐いた。特に理由は無い。

「ところでアッキー」

「だからアッキーは止めると……」

「昨日のショッピングモールの事件、聞いた？」

俺の言葉を遮るようにして発された言葉に、二の句が継げなくなった。内心軽く動揺しつつ、表情はぴくりとも動かさずに言う。

「ああ、アレか……。朝のニュースで見たぜ。いやあ、恐いよなあ？最近多いし。お前さんも気を付けろよ？」

何も自分は関係ない、そういう風に伝わる様に言葉を選ぶ。よもや、思いっきり関わっていたとか言うわけにもいくまい。

「うーん、気をつけようが無い気もするけど？」

苦笑しつつ月森が言った。

「それもそうだ」

なんだかんだで、こいつとも中学の時から腐れ縁ではある。月森秋穂。漆黒の長い髪をポニーテールに結わえた、このクラスの委員長。さばさばしていて、面倒見も良いという、頼れる友人。

失って、なるものか。

放課後。

「蛍、今日はどうする?」

蛍の席に行つて、放課後の予定を聞く。

「んー、今日はみんなと帰りがけに遊びに行くから、一人で帰るよ」
なるほど。

「オツケー、じゃあまた明日な、蛍」

「うん。バイバイ、こーすけ」

蛍と別れ、帰り仕度をして教室を出る。さて、これからどうするかねえ?

下駄箱にて、見知った顔を見つけた。昨日助けた女の子、柊真帆。一学年下の彼女と話した事は無かったが、噂には聞いていた。

曰く、学年随一の美少女。曰く、既にファンクラブが存在する。その彼女の名が、柊真帆。

そんなちよつとした有名人である彼女と、ばったり鉢合わせしてしまった。さて、どうするか。

1・素知らぬ顔で通り過ぎる

2・フレンドリーに話し掛けてみる

3「…お前を、殺す……」と、昨日の事に関しての口封じを……

うん、取り敢えず三つ目は論外。俺はどこのガンダムパイロットだ。というか一番目で決定でいいだろう。

コンマ一秒程で思考を終え、その場を過ぎ去る。いや、過ぎ去ろうとしたのだが。

「あら？貴方は……」

実にあっさり、バレました。

E p i s o d e ・ 0 4 平穏な日々（後書き）

次回は多分、設定回。

設定 第二回（前書き）

今回はヒロインズの紹介ですヨ！。

関係ないですけど、今更ながらにテストメントの使う十字剣、名前が安直過ぎやしないかと思う今日この頃。

設定 第二回

いしだ ますみ
石田 蛸

康介の幼なじみ。高校二年生。昔からの癖で、康介の事を「こーすけ」と呼ぶ。基本的に毎朝、康介と一緒にバイクで登校。肩にかかるぐらいの長さのほわほわとした髪の毛を持つ。康介曰く「癒し系」。

つきもり あきほ
月森 秋穂

康介の隣の席に座る、クラス委員長。高校二年生。黒く長い髪をポニーテールに結わえている。さばさばしていて面倒見も良い性格。康介の事を「アッキー」というあだ名で呼ぶ（苗字の「あかつき明月」の最初と最後の文字を取って）。

ひいらぎ まほ
柊 真帆

第一話にて康介に助けられた少女。高校一年生。黒髪ツインテールなお嬢様。噂曰く、学年一の美少女。ファンクラブが存在する、らしい。助けられた時、康介に一目惚れ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932z/>

仮面ライダーテストメント

2011年12月19日18時53分発行